石屋の祀る山の神・再考
祭祀の実態と篤い信仰への疑問

A Re-examination of Mountain Gods Worshiped by Stonemasons：
The Realities of Religious Rites and a Question as
to the Strength of Their Belief

松田睦彦

MATSUDA Mutsuhiko

はじめに
❶石屋という仕事
❷山の神と石屋
❸山の神祭り
❹フイゴ祭り
❺「篤い信仰」の留保
おわりに

［論文要旨］

小稿は山から石を切り出す採石業に従事する石屋が祀る山の神について，その祭祀の実態を明らかにすることを目的とする。しかし，この目的を達するためには，生業と信仰の関係に注目した研究を取り巻く３つの問題点を克服しなければならない。すなわち，取りあげられる生業が限定的であること，祭祀の形態についての報告が多くその実態が明らかでないこと，そして，特定の職と職能神との固定的な関係性を前提としていることである。

小稿では，この３つの問題点をふまえたうえで，瀬戸内海地域で活動してきた石屋の山の神祭祀を具体的に検討した。その結果，祭神については特定の神仏と結びつかない例のほか，大山祇神社の大山祇命や石鎚山の石鎚大神といった近隣の社寺の祭神などを祀ることが明らかとなった。また，祭日については正月・５月・９月の７日または９日という例が多いが，これは近畿から中国，四国に広がる７日または９日を山の神の祭日とする考え方と，九州地方を中心に広がる正月・５月・９月を山の神の祭りを行なう日とする考え方が融合したものである可能性を指摘した。さらに，祭場については山中の特定の場所に簡易に祀るものから神社として祀るものまで多様であり，祈願内容については不慮の事故の防止や良質の石材の産出などが挙げられた。

ただ，こうした祭祀の様相は，祭祀の実態を示すものではない。そこで，山の神祭りを行なってきた当事者の語りに注目し，それを同じく石屋の祀る神であるフイゴ神の祭祀についての語りと比較した。すると，これまで石屋の祭祀の中心をなすと考えられてきた山の神に対する信仰が，必ずしも熱心だとは言い難いものであることが明らかになった。こうした結論は，３つの問題点の３番目に挙げた特定の職と職能神との固定的な関係を前提とした研究のはらむ危険性を示すものでもある。

【キーワード】石屋，信仰，職能神，山の神，フイゴ神

はじめに

小稿は山から石を切りだす採石業に従事する人びとが祀る山の神について，その祭祀の実態を明らかにすることを目的とする。

生業と信仰との関係については，古代や中世の職能集団が自らの独占的立場を強固にすることを目的のひとつとして保持していた信仰や，近世の職能の急速な分化による新たな職能守護神や技術祖神の成立，そして近現代の産業の発達にともなう新たな信仰の成立など，さまざまな研究が積み重ねられてきた。しかし，そこには３つの問題を指摘することができる。

ひとつは，この分野の研究の多くが職の正当性を由来や権威によって主張しようとする偽文書や由緒書への興味と接続しており，史料からも伝承からも，その起源を中世までさかのぼり得るような職種を中心に研究が進められてきたということである。こうした研究は，職を媒介とした人と神仏との関係を明らかにしただけでなく，人びとの文字に対する特別な視線に注目し，偽文書の史料的価値を確立した。しかし一方で，従来の研究が「中世に起源を持つ特殊な技能の職人集団を中心にしており，タタラ師やマタギ，木地師などにみられる漂泊性や祖神伝承がクローズアップされてきた」という経緯も否定することはできない［加藤 2010：82］。つまり，多くの生業においてさまざまな信仰が生起し，伝承されてきたにもかかわらず，それらが研究の俎上に載せられる機会が少なかったということである。

２つ目は，従来の研究からは信仰の実態が見えづらいということである。自戒を込めながら端的に言うならば，研究者の記述が的確に信仰の実態を表現し得ているのか疑問が残るということである。これまでさまざまな生業にともなう信仰について，その祭神や祭日，祭祀者や祭祀組織，供物，禁忌などの祭祀の形態が明らかにされてきたが，その記述が詳細であればあるほど，読み手には信仰や祭祀が記述のとおり厳密に行なわれているかのように印象づけられる。もちろん信仰の核心を見極めようとする視点が研究の基本となることに異論はないが，祭祀の実態は多様である。たとえ信仰の本質とはかけ離れたかにみえる人と神仏との関係性であっても，それが実態の一部だと認識して記述することは重要であろう。実際には生業上のどのような局面で信仰が顕在化するのか，また，祭祀者の信心がどれほど篤いものなのか，信仰が結ぶ集団の社会的役割はどのようなものであり，それは時代によってどう変化してきたのか。こうした関心に答える研究を目指すのであれば，祭りの形態のみを記述するだけでなく，当事者の意識にまで踏み込んだ報告がなされるべきであろう。

３つ目は，高度な技術を必要とする職とその職をつかさどる神仏という固定的な関係が無条件に前提とされ，その前提を成立せしめている要因，たとえば個々の生業の技術や組織，従事者の社会的立場，その生業の家計に占める位置などに対する関心が薄い傾向にあるということである。とくに，自然と人とが直接対峙するような生業にともなう信仰については，容易に抗うことのできない自然や，自然をつかさどる存在が絶対的なものとして神格化されがちである。しかし，自然との関係性のなかで実際に生きている人びとは，決して圧倒的な自然を前に手をこまねいているわけではない。かれらは常に持てる技を磨きながら虎視眈々と自然の超克をもくろんでいるし，神との約束

を都合よく解釈しようとする。つまり，生業と信仰との関係は，不可侵の存在としての自然とそれに従う人間との固定的な関係としてではなく，圧倒的な自然のなかにありながらも，その自然との関係を自らの有利な方向へと引き寄せようとする人間の模索のなかに見出されるべきなのである。

堀一郎は「一般に技術伝承が複雑で，かつ他の模倣を許さぬようなエクスクルーシブな技術集団ほどその祖神または守護神信仰とその儀礼は強固である。また一般の農民や漁民から差別され，あるいは畏怖，あるいは卑賤視された職能集団も集団の個別意義に応じて，祖神や集団樹立者への信仰は強く伝承されている。また危険の多い職業，不可抗力，たとえば天候とか気象，そのほかの条件に左右されるものも，守護神の意識や信仰は強いように思われる」という的確な指摘を残しているが［堀 1959：98］，この指摘は必ずしも神仏との関係が強固な生業へと研究を誘導するものではないはずである。技術伝承の複雑さや集団による技術の占有性の度合い，農民や漁民との関係性や自然から受ける影響の強弱など，生業ごとに異なる条件がどのように信仰へと反映されるのかといった課題に取り組むこともまた重要であろう。したがって，生業と神仏との固定的な関係は一度解消される必要がある。

さて，石屋の活動は築城にともなう需要を背景に中世後期から活発になるが，特別な職祖伝承や由緒書などは残されておらず，これまでの研究の積み重ねは多くはない[(1)]。そうしたなか，筆者は以前，石屋の山の神信仰の概要と，石屋以外の人びとによって地域で祀られてきた山の神が石屋の移住によって，石屋の山の神に読み替えられていく様相を香川県丸亀市広島の事例から明らかにした［松田 2010：237-264］。そこでは，石屋の山の神信仰の概要については示したものの，祈願の内容や山の神の性格，祭祀の方法などについての具体的な検討は行なうことができず，さらに「石屋の山の神信仰の根底には災害への恐怖がもっとも大きな位置を占めている」という抗うことのできない自然と生業という関係性を無条件に前提とした見解を示すにとどまった。また，それに先立つ拙稿でも岡山県笠岡市白石島の石屋の山の神祭りを取りあげたが「石材業者の減少に伴って信仰形態も少なからず変化を遂げてきたが，信仰を守ろうとする意志は今なお強固である」と［八木橋・遠藤・松田 2001：7］，今考えれば必ずしも信仰の実態を反映しているとは言い難い報告に終始している。

そこで小稿では，上記の 3 つの問題点に留意しながら，瀬戸内海地域における石屋の山の神信仰の実態についてあらためて明らかにしたい。とくに 2 点目と 3 点目の問題点を克服するために，石屋と山の神との関係性を，山の神についての石屋の語りとフイゴ神という石屋の祀る別の神の祭りについての語りを比較することで相対化したい[(2)]。

❶……石屋という仕事

①　石材産地と石屋の移動

まずは基礎的な作業として石屋という生業について確認しておこう。

石屋あるいは石工と呼ばれる職人にはいくつかの種類がある。すなわち，石の採れる山や海岸などから石材を切り出して適度な大きさに荒加工する人びと，荒加工された石材を墓石や灯籠，石仏などの製品に加工する人びと，そして畑や護岸工事の現場などで石の形を整えて石垣に積む人びと

などである。これらの石屋は，名前こそ共通するものの，必要とされる技術や労働環境にはそれぞれ類似点や相違点がある。小稿で取りあげる石屋は，最初にあげた石を切り出し，荒加工をする人びとである。

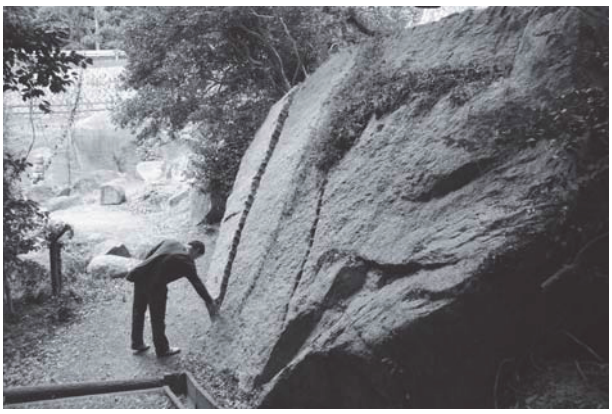

写真１　大坂城の石垣用石材を採った香川県小豆郡小豆島町の岩谷丁場遺跡

瀬戸内海沿岸および島嶼部では，古くから花崗岩を中心とした石材が切り出されてきたが，その役を担ったのもまた，瀬戸内海周辺の人びとであった。現在では輸入石材の増加にともなって採石業の不振が続いているが，歴史的経緯としては中世末から近世初頭にかけて大坂城の築城をはじめとする大規模な工事や，近世中ごろから盛んに行なわれるようになった新田開発や塩田の築造，そして近代化にともなう港湾の整備や建築ラッシュといった，各時代における需要に応える形でその技術が発展・継承され，やがて石屋をおもな生業とする地域や集団が形成されていったことは間違いない（写真1）。

また，同様な社会的需要のもとで石材産地も形成されていったと考えられる。それほど厳密に石材の質を問わない土木工事の場合，できる限り現場付近で石材の調達が行なわれることが望ましいが，足りなければ大量の石材を切り出すことのできる土地から入手しなければならない。さらに，特別に大きな石材を必要としたり，石質の美しさが求められたりする場合には，石材を調達することができる土地は限られてくる。

このようにして選ばれた土地には石屋たちが集まり，石材産地が形成される。瀬戸内海沿岸や島嶼部には，花崗岩の代名詞ともなった兵庫県の御影をはじめとして，家島・小豆島・犬島・庵治・与島・讃岐広島・北木島・白石島・伊予豊島・伊予大島・倉橋島・黒髪島・大津島など，数多くの石材産地がある。近世までは，石屋たちは需要に応じてこれらの土地で石を切り，仕事が終わればそれぞれの地元に戻ったのではないかと想像されるが，現在のところ史料的裏づけはない。近代に入ると石材需要の増大から，石材産地への石屋の定着性は高まる。たとえば，岡山県笠岡市北木島では1865（慶応元）年に地元の先駆的起業家が5ヶ所の常設の丁場を開設し，50名の石工が働いていたとされるが［元気ユニオンin北木1996：136］，そこで働いていた石屋の多くは地元住民ではなく島外から来た職人だと考えられる。それは，石屋の技術が一朝一夕で身につくものではないからである[(3)]。前掲書によると1873（明治6）年には早くも「伊予・伯方島より石工6名来島し数カ所に丁場を開設，採石開始」しており，1962（昭和37）年段階では86の丁場のうち50が「外来者経営」であったという[(4)]。その大半が愛媛県越智郡の出身者であった［宮本1970：226］[(5)]。おそらく，北木島初の丁場で働いていたのも彼らであろう。

さて，このように産地外からやって来た石屋は，石材産地で常設の丁場を開設し，はじめは片足を石材産地に置き，それでもまだもう片方の足は地元に残し，人によって残した方の足に重心を置いたり，石材産地に重心を移したりしながら石を切っていた。地元と石材産地を行き来するその複

雑な様相については以前論じたとおりであるので，ここでは昭和に入ってからの概況を示すにとどめたい。

もともと石屋は移動性の高い職人である。その移動には丁場経営者によるものと雇用される職人によるものの２種類がある。すなわち，職人として雇用される人びとによるものと，自らも職人でありながら丁場の経営を手掛ける人びとによるものである。

雇用される職人は経営の安定した丁場，食事や日給などの待遇の良い丁場，地元に近く帰省しやすい丁場など，自分の求める条件に合致する各地の丁場を，家族を地元に残して単身で自由に渡り歩いた。給料は盆と正月の節季に支払われ，他の丁場への移籍や地元への帰省はこのタイミングで行なわれた。

一方，丁場経営者は良質の石材の産出具合，山主に支払う採掘料，近接地での大規模な石材需要などの経営環境を考慮しながら，石材産地を移動する。つまり，よい石が出なくなったり，需要が低迷したりすれば他の産地に移って新しい丁場を開くのである。

丁場経営者の移動は，雇用される職人と同様に単身で行なわれることもあるが，家族をともなって石材産地に移り住むことも多い。その場合，地元との関係は多様で複雑となる。家督相続予定者か否か，地元に残した財産の多寡などにもよるが，地元に残る必然性の薄い人の場合には，両親が健在な間には盆と正月の帰省が定期的に行われていたとしても，両親が亡くなれば徐々に地元とも疎遠になる。また，子供も丁場のある土地で育てば，両親の地元は縁の薄い土地となる。ただし，石材産地での生活は，石屋にとって必ずしも居心地の良いものではなかった。もともと石材産地に住む人びとにとって，石屋は裕福なよそ者であったからである[(6)]。高額の採掘料を払うとはいえ，自分たちの島を切り崩して売り，自分たちよりも裕福な暮らしをする人びとを快く思うはずがない。石材産地の住民と石屋との対立は，地域によっては近年まで続いており，丁場を閉じた，あるいは一線を退いた石屋が石材産地に残るか，それとも地元や他の土地に再び移動するかといった問題に強い影響を与えている［松田 2010：170-208］。堀の指摘にもあったように，こうしたよそ者としての立場は，石屋の信仰に一定の影響を与えたことが想像される。

②　採石の技術

石の切り出しは，古くは地表に露出した岩盤や，何らかの理由で岩盤から切り離された転石を必要な大きさに割っていく作業であった。近代に入るとまずは火薬が，戦後になるとチッピングハンマーや鑿岩機，ジェットバーナー，バックホーなどが次々と導入され，採石は岩盤そのものを掘り込んでいく作業へと変化した。ただ，石に鑿で穴をあけ，矢と呼ばれる鉄製のくさびを打ち込んで割るという採石の基本的な方法は中世以来変わらない。

採石の作業を順に追ってみよう。

まずは大割である。大割とは岩盤から一定程度の大きさの石を切り離す作業をいう。岩盤から石を切り離すには，矢を用いる方法と火薬を用いる方法とがある。火薬の導入以前にはかなりの大きさの石でも大きな矢を多く打ち込むことで割っていたが，それにかかる労力は大きく，また思うとおりの位置で石を割るには熟練を要した。しかし，明治も半ばを過ぎて火薬が導入されると，長いものでは３メートル以上もの長さになる煙硝鑿で穴を直線上に何本も掘り，そこに火薬を詰めて爆

破させて石を割る方法が普及する。現在では，石の垂直方向についてはジェットバーナーで焼き切る方法が一般的だが，水平方向に関しては火薬が用いられている。穴を掘る作業には鑿岩機が使われる。

こうして岩盤から切り取られた石は，石のなかを走るキズを巧みに避けながら，墓石や地形石，間知石などの規格に合わせてさらに小さく割っていく。その際には，石の節理を読み，キズを見極める目が必要とされる。この小割の作業には現在でも矢が使われている。ただ，穴をあける道具や矢そのものは，昔のものとは異なっている。古くは鉄製の鑿をセットウと呼ばれる金槌で打って矢穴をあけていたが，戦後，チッピングハンマーが導入され，矢穴をあける作業が機械化された。この段階では，矢は扁平型であり，矢穴もそれに対応して扁平であった（写真2）。その後，鑿岩機が導入されると，石に丸い穴があけられ，丸矢が用いられるようになる。

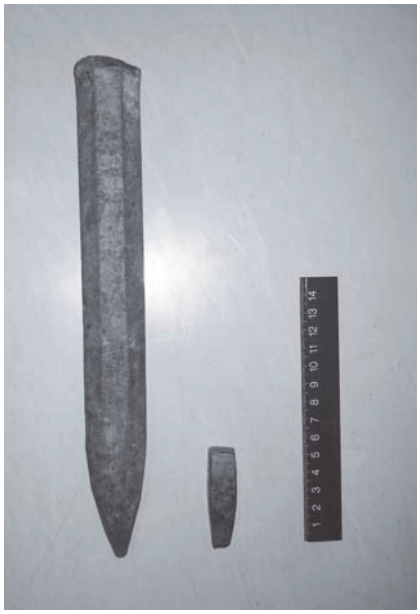

写真2　鉄製の鑿（左）**と矢**（右）

こうして規格の大きさに割られた石は，フタツマタ・ネコグルマ・シュラなどの運搬用具に乗せられて急な山道を降り，海岸近くの石の溜め場に運ばれて船での出荷を待った。昭和40年代になると，徐々にトラックも普及しはじめ，現在ではトラック輸送が主流となっている。

さて，こうした一連の作業には2つの意味で熟練の技を要する。まず，石の節理を読み，キズを見極め，さらに正確に矢穴をあけなければ石は思うように割れてくれない。思うように石が割れなければ無駄も多くなり，収益率は下がる。ひとつの塊からどのような規格の石をいくつ取ることができるか。石を正確に割る技術は容易には身につかない。一方，もうひとつのポイントは，危険の回避である。言うまでもなく，石は硬くて重い。さらに，丁場では火薬や鑿岩機，ジェットバーナー，バックホーなどさまざまな道具が使われる。近年では労働基準監督署の厳しい指導によって死亡事故は減少傾向にあるが，好景気に沸いた高度経済成長期にはとくに，高所からの転落，落盤，火薬の暴発，重機事故等により多くの人が命を落としたという。こうした高度な技術の必要性や作業場の危険もまた，堀が指摘する信仰を強化する条件と合致している。

❷……山の神と石屋

依代としての石や岩についての研究蓄積は多く，軽々に議論することはできないが，「イワクラの語がよく使われるように，峨々たる山上の厳石は，神クラとしての神の最も好み給うところ」だとする考え方は一致するところであろう［堀田1980：30］。野本寛一は「神，神の憑依，祭祀施設にかかわる石，岩，岩窟などを一括した広義概念を磐座」としているが，これを「即神的認識の強いものを石神とし，依り代的認識の強いものを，狭義的，本義的な磐座とする。さらに，施設的傾向の強いものを磐境」と整理している［野本1975：20］。すなわち，石そのものが神として崇めら

れ，また，石が神の依り代となり，さらに，神の示現する場が石によって整えられるということである。(7)

したがって，石は神秘的な力を有することとなる。追いかけてくる伊邪那美命に対し伊邪那岐命が黄泉比良坂に大きな石を引き据えて黄泉国と現世との境を塞ぎ，その石が黄泉戸大神とも道反之大神とも呼ばれて神格化される例にはじまり，陽石への信仰や子産みの伝承，石が成長するという伝承など，石に特別な力を認める事例は枚挙にいとまがない。

こうしたとかく霊性を帯びやすい石に鑿をあて，矢を打ち込んで割り取る破壊的な存在が石屋である。それがいかに無謀な行為であるのか，各地に残された伝説が示している。

万治の石仏（長野県諏訪地方）

諏訪神社下社春宮の西側を流下する戸川の中に下社七不思議の一ヶ所にして祓戸神を祀る浮島がある。この島の背面川上の水に臨んで大石がある。これは藩主諏訪忠晴公の祈願に依り明神様の石の鳥居を建立せんとして石材を割り取らうとした。然るに如何とも工事が進捗しない，これ必ず霊石であらうとて仕事を中止したといふ。後に石工等この石を刻して弥陀の姿とした由である。

南無阿弥陀仏　　願主　明誉浄光心誉広春

万治十三年十一月一日

と刻んである。［『郷土』石特輯号］

泣き石（岡山県）

岡山県御津郡大窪の田の中に泣石（縦二間横三間）と云ふのがある。これは昔石工が之れを割らんとして石に穴を穿けた処石が泣き出したため中止したと云ふ。［『郷土』石特輯号］

エボシイワ（広島県）

広島県江沼郡津之郷村の弘法水の下にある烏帽子岩は，石工が割ろうとすると赤い血が迸り出たなどと伝えている。［『綜合日本民俗語彙』第一巻］

いぼ石（長野県諏訪地方）

川岸村の沢村地籍にも，二年前までいぼ石があった。いぼ型をした突起が数限りなくついて居て，子供達はいぼが出来ると其処へ行って，自分のいぼと石のいぼに棒を渡していぼゝゞ一本橋渡れと唱へた。いぼ石の上には南無妙法蓮華経の立石があった。それを一昨年（昭和五年）地主が割って片付けてしまったが，割った石工は其の時怪我をしたと言ふ。高さ七，八尺の石であったと。［『郷土』石特輯号］

鳴石（なるいし）（長野県北佐久郡蘆田村）

鳴石原にある石だ。又鏡石（カガミイシ）ともいふ。鏡餅の様な形をしてゐる。略伝記には「甘酒嶺（アマザケトウゲ）の辺にあり，経七尺にあまる大石なり大古大神の宝鏡飛んで石となりし所といふ。中古石工此石を割らんとして槌もてこれを打つ。時に山鳴谷答へて山中震動し石工其処に死せりといふ。故に今大いにうつことをいましむ。すこしうつ時は金磬の鳴るが如し。奇とすべし」とある。今もこの石には注連を張ってある。そのそばにまゆみの木が立ってゐる。［『郷土』石特輯号］

このように，神秘的な力を帯びた石は容易には石屋に割ることを許さない。不思議な力をもって作業の進捗を妨げる。また，鑿をあてられ玄能を振り下ろされたとしても，石は泣き声をあげ，血を流すことによって霊威を示して割られることに抵抗する。さらに，ついに割られてしまった場合でも，ただでは引き下がらない。割った石屋にけがを負わせ，時には死に至らしめる。(8)

もちろん，これらの伝説の主人公は石そのものであり，石屋はあくまでも石の霊性を引き立てる道化にすぎない。ただ，ここで確認しておきたいのは，石が何らかの不可思議な力を持つと一般的に考えられてきたということと，それとは反対に，石屋がそれに真っ向から挑む存在であるということである。魂の籠る存在としての石と商品としての石との間で，石屋の立場はあまりにも矛盾している。この矛盾に対する悩みが石屋の山の神に対する信仰の背景に控えていることが予想される。

一方，「山の神信仰は，山地を支配する神の信仰」である。「山地は大地の自然を代表し，そこに文化を獲得していく人間の占有儀礼に対応して，山の神が存在」するのである［小島1979：35］。柳田国男は「『山ノ神』は今日でも猟夫が猟に入り木樵が伐木に入り石工が新に山道を開く際に必ず先づ祭る神」であるとし，その起源を「祖先の日本人が自分の占有する土地と未だ占有せぬ土地との境に立てゝ祀ったものでありませう」と推測しているが［柳田1906:657］，山の神の領域に入り，山の神の所有物である石を切り出す石屋が山の神を祀るというのはごく自然なことであろう。こうした前提が，山の神がつかさどる生業のひとつとしての石屋という研究上の位置づけを確たるものにしたようである。

❸……山の神祭り

①　事例

石屋の職能神としての山の神に対する研究者の関心は比較的早い時期から示されていた。具体的な報告としては橋詰延壽の「毎月旧十九日が山の神の日であるので，地主に関係なく，木びき，石割の者が山の神を祭る」という高知県吾川郡諸木村（現高知市春野町）の事例が古い。この報告では「掘立小屋にした山小屋を作り，竹の簀の上へ祭る。ヲコゼを一匹竹にさして焼く。ヒレの形がくづれない様にするのが大事。祭りが終ると皆がイタダク。此の日午前中は山の仕事をするが，午後は休む。そして山へは行かない」ということが記録されている［橋詰1937：8］。しかし管見の限りでは，その後の報告は必ずしも多くはない。だが，茨城県真壁郡真壁町（現桜川市真壁町）で正・五・九月の八日に山の神祭りが行なわれ，20年に3～4回の割合で採石の石屋と加工の石屋が「合同山の神祭」を行なうという報告や［西村1968：43］，愛知県岡崎市の「石切りをやる山石屋は，山の神を祭る風習があり，旧の一一月七日に丁場にボタモチ，オミキを供えて，この日は仕事を休んだ。とくに山石屋のタブーとして，汁かけ飯はいっさい食べないし，サル（猿）ということばを使わないなどは，かれらの山民性を物語るものかもしれない」といった報告は［磯貝1959a：293］，石屋による山の神の祭りが広く行なわれてきたことを示す材料として十分であろう。

ただ，上記のように石屋が毎月，あるいは年に数回山の神祭りを行なうとする事例については報告があり，また筆者も聞き取り調査において確認しているが，日常的に山の神への祈りを欠かさな

いという話は聞かれない[9]。したがって，以下の記述は年に３回程度行なわれる山の神祭りを中心としたものとなる。また，高度経済成長期に隆盛を極めた採石業が，平成に入ってからの輸入石材の増加によって衰退していることも前述のとおりであり，現在では山の神祭りがほとんど行なわれていないということも申し添えておきたい。

それでは，瀬戸内海地域の石屋はどのように山の神を祀ってきたのであろうか。いくつかの文献資料と筆者による調査データにもとづいて具体的な事例を提示したい。

〈事例 1〉岡山県笠岡市白石島

古くは３つある谷筋ごとにまとまって「日本総鎮守 大山積大明神」と書かれた掛軸をまわしていた。祭日は正月・４月・９月の９日である[10]。Ａ谷が正月，Ｂ谷が４月，Ｃ谷が９月の祭りを担当し，担当する谷の１軒が宮元となった。この日は丁場を休み，宴会をする。しかし，近年は石屋が減少したことから，組合の小屋に設けた祭壇で掛軸を祀っている。また，島の氏神である四社神社拝殿脇の石祠でも大山祇命を祀っている。丁場で個人的に山の神を祀る人もいる。また，毎年旧暦４月 22 日には，愛媛県今治市大三島町の大山祇神社の例大祭にお参りに出かけた。［筆者調査 2000］

〈事例 2〉岡山県笠岡市北木島

島外から集まった石屋の集落である瀬戸では，大きな岩の下の石祠に大山祇神社の神札が祀られていた。正月・５月・９月の９日が祭日で，瀬戸の 10 軒の石屋が集まっていた。この日は幟を立てて魚と銭を供え，石屋の１人が祝詞をあげた。また，旧暦４月 22 日の大山祇神社の例大祭には石船などを頼み，船を仕立ててお参りに行く石屋もいた。さらに１月と８月には，くじ引きで決められた当番２人が講帳を持って大山祇神社に参詣し，神札を持ち帰った。［筆者調査 2001］

〈事例 3〉香川県高松市牟礼町

丁場の石屋にとって一番大事なおまつりは，山の神様の祭りである。正，5，９月の７日と年に３回お祭りをする。その日は休みとなる。この日は親方は徹夜で山の神様の社にこもって山仕事の安全と繁昌を祈願する。［瀬戸内海歴史民俗資料館 1989：42］

〈事例 4〉香川県小豆郡小豆島町

山の神は採石場ごとにまつり神酒，花をあげる。年に一回，一月九日に神社境内にまつる山の神に参る。内海町福田の山神は，拝殿の向うに花崗岩の石祠がある。明治三十九年五月建之，寄附人当村石丁場中とある。この石祠が安置されるまでは，数畳に及ぶ巨岩の下にちょっとした石をたてて祠[ママ]っていた。［岡山民俗学会・香川民俗学会 1970：301］

〈事例 5〉香川県坂出市与島町与島

山の神は石屋の守り神様である。東方と西方の山にあったが，大正８年１月に天津神社の裏山に石鎚さんと並べて祠[ママ]った。

正月，５月，９月の９日がその祭りで，お神酒，イリコ，アライヨネ，オコゼを供える。特に５月の９日は子どもずもうが奉納されている。［瀬戸内海歴史民俗資料館 1981：57］

丁場で山の神を祀ることはなかった。神主を呼ぶということはなく，祀り方を知った石屋が祀っ

た。山の神の日には絶対に石に触らない。石船の人にも触らせなかった。［筆者調査：2001］

〈事例6〉香川県丸亀市広島町青木

昭和30年代の前半には，正月，5月，9月，11月の8日に山の神の祭りが行なわれていた。11月は7日のフイゴ祭りと連続して行なわれた。祭りでは火を焚き，神酒，ハジキ豆，ナンキン豆，さきスルメなどが供えられた。青木の石屋が3つの班に分かれて1回ずつ当番をつとめた。また，青木では各丁場で個人的に山の神を祀る人も多い。現在，18軒の石屋のうち10軒の丁場で山の神を祀っており，ある丁場では路傍の大きな石の上に祀られていた。石を組んだだけの祠で，ただ「山の神」と呼ばれている。古くはこちらの山の神が祭りの中心で，正月，5月，9月の9日には必ずお参りをした。［筆者調査2001］

石工は山の神をまつり安全を祈るためにオコゼをそなえる。［武田1966：496］

以上は，年中行事としての山の神祭りの事例がほとんどであるが，石屋が山の神に対して手を合わせるのは祭りの日ばかりではないことにも留意しておこう。たとえば，丁場経営者の自宅や丁場の事務所の神棚などに祀られる場合には，天照皇大神や恵比寿大黒などと一緒に日々手を合わせることになる。また，大きな事故が起きたり，質の良い石が産出しなかったり，石の売れ行きが悪かったりといった場合には臨時で山の神が祀られることもある。

それでは上記の事例を整理してみよう。

②　祭神

まず，祭神について考えてみたい。石屋が特定の社寺や神仏を山の神として祀る事例は多い。そのなかで最も多いのは，〈事例1・2〉で見られるように，愛媛県今治市大三島町に鎮座する大山祇神社を山の神の総鎮守とするものである。これは大三島やその周辺の島々，とくに伯方島や大島が多くの石屋を輩出してきたことに起因すると考えられる。毎年旧暦4月22日の例祭に大山祇神社に参拝することが年中行事となっていたこれらの地域出身の石屋が，伊邪那岐命と伊邪那美命が山の神として生んだ大山祇命を石屋の神として信仰するのは自然な成り行きであろう。大山祇神社に対する彼らの信仰は，彼らの移動とともに各地の石材産地へと伝えられた。岡山県笠岡市北木島や白石島，愛媛県上島町弓削豊島の石屋は，旧暦4月22日には山の神としての大山祇神社に参拝していたという。また，岡山県笠岡市北木島町では1908（明治41）年に地元出身の採石の先駆的起業家によって「大山祇命」の大きな石碑が建てられる。その碑文には「嗚呼本島をしてかかる盛運を得しめしもの一に是れ大山祇命の恩」と刻まれている。

こうした，特定の社寺や神仏に対する信仰は他にもある。たとえば，香川県坂出市与島町与島では奈良県吉野郡の大峰山寺を奉斎する山上講が石屋を中心に行なわれ「正月5月9月の6日がご命日」だという［瀬戸内海歴史民俗資料館1981：59-60］。また，香川県丸亀市広島町の石屋が祀る山の神は石鎚山との関係が深い［松田2010：253，258］。その他，石屋が個人で祀る神仏は多様である。

地域によって異なるが，石屋たちは祭神の特定されない山の神を祀ったり，特定の祭神を山の神として祀ったり，あるいは両方を山の神として祀ったりと，様々な形で山の神を祀ってきた。(11)

西村浩一は職人や商人の信仰が「実際には，一つの職種で二種類以上の神仏を信仰していたり，

地方によって相違するなど，さまざまな要素が入り混じっているので複雑な状態を呈している」と指摘するが［西村 2000：47］，「神は人と隔絶したものではなくて，人間と連続する神であり，神の機能は神みずからの意思にもとづいて人の上に働きかけるというよりは，人間の個人的・社会的願望の投射として性格づけられる面がいちじるしい。それゆえ職業神というものも，あるいは産業守護神も，その土地により，また職業集団によって必ずしも同一ではなく，その性格や伝承もすこぶる区々たるをまぬがれない」のであろう［堀 1959：97］[12]。

③　祭日

瀬戸内の石屋の山の神祭りは正月・5 月・9 月に行なわれ，7 日から 9 日のいずれかの一日が選ばれる傾向にある。堀田吉雄は山の神の祭日について，12 日とする列島「東北部」と 7 日と 9 日とする「中央部」，そして，15 日や 19 日とする「九州四国」とに 3 大別している。このなかで，中国地方は「九日地帯」に分類され，さらに「東海，中部山岳地帯から近畿の南部に及ぶ」「七日地帯」が「紀伊水道をわたって，四国の阿波，伊予にまで伸びている」と指摘しており［堀田 1966：221-226］，これは瀬戸内海地域の石屋の山の神祭りの日程と合致する。

それでは，祭の行なわれる正月･5 月･9 月という月も地域的傾向をあらわすものなのであろうか。堀田は肥後や薩摩で正月・5 月・9 月の 16 日に行なわれる山の神祭りが多いことから，「年に三回という形も九州の一つの特色」としている［堀田 1966：226］。たしかに，「山の神講は正・五・九月の十六日。炭焼が多いので毎月十六日に山の神を祭るが南河内の様に之を氏神でするものもあれば，又家々でするものもあり一定してゐない」（旧長崎県東彼杵郡萱瀬村），「正･五･九月の十六日，山方をする者が祀る」（旧熊本県球磨郡神瀬村），「正・五・九月の十六日山の神を祭る。この床の間に榊・焼酎を供へる。猟のないときはよりたてて焼酎でものみ山の神祭を行ふ」（旧鹿児島県肝属郡百引村），「旧の正月・五月・九月の十六日が山神祭」（鹿児島県大島郡宇検村）など，正月・5 月・9 月に山の神を祀るとする多くの事例を九州各地で見ることができる。その一方で「山コ（炭焼）のは三トキ（正五九月の十六日）と五節句」（旧島根県仁多郡八川村），あるいは「毎月十九日から二十日が祭日。正，五，九の十九日には山仕事する炭焼などが必ず祭る」（愛媛県北宇和郡御槙村）とあるように，その範囲は中国地方から四国地方にまで広がっている［倉田 1937：420-423］。

以上の事例から，正月・5 月・9 月の 7 日から 9 日にかけて行なわれることの多い石屋の山の神祭りは，近畿から中国，四国地方に広がる山の神の祭日を 7 日あるいは 9 日とする考え方と，九州地方を中心に広がる正月･5 月･9 月とする考え方が融合したものである可能性が指摘できる。では，この融合はいかにして起こったのか。少ない事例から判断するのは危険であるが，上の事例で注目したいのは，この日程で山の神祭りを行なっているのが炭焼や猟師だということである。こうした移動性の高い人びとが九州から中国・四国へと山の神を祀る作法を伝え，やがて石屋もそれに従った，あるいは，石屋自身が各地を渡り歩く過程で山で働く人びとと接触してこうした作法を身につけたと考えたいが，ここではその可能性を示すにとどめる。

さて，山の神の祭日についてはもう一点指摘しておこう。それは，11 月にフイゴ祭りと山の神祭りが連続して行なわれる地域があるということである。〈事例 6〉では，香川県丸亀市広島町青木で正月・5 月・9 月の 8 日のほかに 11 月 8 日にも山の神祭りが行なわれ，これが 11 月 7 日のフ

イゴ祭りと連続していたことが報告されているが，筆者の調査では岡山県笠岡市北木島町など，他の地域でも同様の話が聞かれた。堀田は「伊勢伊賀を中心として，濃尾三の東海地方から志摩紀伊大和にかけては，霜月七日と，正月又は二月の七日というのが山の神の祭日で，祖霊祭の時期と頗る近似している。また，近江から北陸，中国地方にわたっては，これが九日に変るだけである。七日地帯も九日地帯も誠に広い地域にわたっているが，霜月に重点を置くか，二月に重点を置くかは，土地土地によって異っている」とするが［堀田1966：187］，正月・5月・9月とは別の流れをくむ山の神の祭日が11月7日あるいは9日であり，その間の8日がフイゴ祭りであることは，石屋にとっては非常に都合が良い。11月7日あるいは9日も山の神の祭日である，ということを知った石屋が，その祭日を積極的に導入したことは想像に難くない。フイゴ祭りについては後述する。

④　祭場

石そのものが神となり，依代となり，祭祀施設となることについては，先述のとおりである。〈事例2・4〉のように巨岩の上や下に特徴的な形状の小さな石を祀るといった事例は，石そのものを祀る形態に近いものと考えることができるだろう。その他，山中の特定の場所や神社の境内などに石祠をしつらえたものがあり〈事例5・6〉，山の神神社として社まで作られることもある[13]（写真3・4）。また，石屋の組合や仲間内で掛軸を保有し，宮元の家や組合の事務所などに祭壇が設けられる例もある〈事例1〉。石屋の労働形態がもともと石の産出状況や需要に応じて移動を繰り返すものであったことを考慮すると，神社や石祠ではなく，山中の巨石等，とくに目立つ場所を簡単な祭壇としたのが古い形ではないかと想像される。

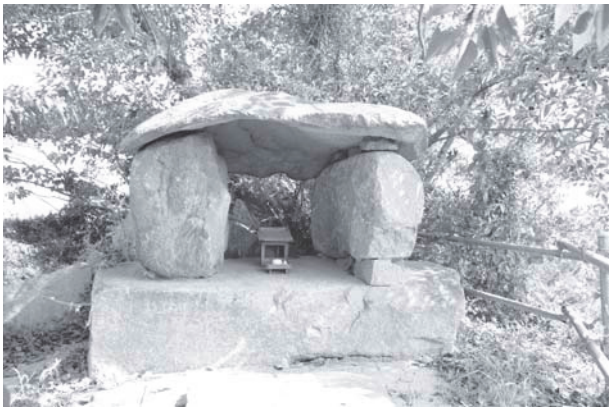

写真3　山中に祀られている愛媛県今治市宮窪町の山の神

さらに，丁場経営者の自宅や丁場の事務所の神棚に祀られることがあるということについても上述のとおりである。

写真4　香川県丸亀市広島町甲路集落が祀る山の神

⑤　祈願

祈願内容については，山での作業安全が最も重要な位置を占める。職人の職能神に対する祈願の内容は「技術の発展向上，家内安全，商売繁盛など守護を願った現世利益的なものが中心」

だと指摘されるが［西村 2000：48］，これは石屋においても当てはまる。石屋が，山の神の所有物であり，そのものに特別な力が認められることも多い石を割り取ることを生業とする存在であり，さらにその仕事がいかに危険ものであるかということについては先述のとおりである。労務管理の厳しくなった現在でも死亡事故は絶えず，その死に方も壮絶である。また，怪我にいたっては日常的に起こっている。人がどれだけ意を注いでいても防ぐことのできない事故をできる限り減らすためには，「山地を支配する神」としての山の神に祈願するしかない。筆者は以前，1963（昭和 38）年に 2 名が命を落とした事故がきっかけとなって，香川県丸亀市広島町で山の神の祭りが盛んになったという事例を紹介したことがあるが［松田 2010:258］，これは，人知を超えた災害に対しては，神仏への祈願に頼らざるをえないことを示す典型的な例であろう。ただ，このことをもってただちに石屋の山の神への信仰を熱心なものと判断することは差し控えるべきである。事故の直後には一時的に神仏への加護を強く求めたとしても，必ずしもそれが継続するわけではないからである。

また，山の神への祈願内容としては他にも商売繁盛，すなわち良石の産出や販売量の拡大があることにも注目しておく必要がある。

❹……フイゴ祭り

石屋の祀るもう一方の神であるフイゴ神の祭りについても触れておこう。

フイゴとは高い燃焼を獲得するために酸素を供給する送風装置である（写真 5）。鋳物師や鍛冶屋，鋳掛屋など，金属の溶解・製錬・加工にたずさわる職人などによって用いられてきたが，石屋もまたその使用者の一人である。石屋は鉄製のノミで石に穴を穿ち，鉄製の矢をゲンノウで打ち込んで石を割る。したがって，鍛冶は石屋が必ず身に着けなければならない技術のひとつであり，石屋がフイゴを祀ることは一般に行なわれてきた。ただ，これまで石屋の行なうフイゴ祭りが研究者の注目を集めることはなかった。それは，石屋にとってのフイゴが石を採るという仕事の本質に直接的にかかわるものではなく，また，石屋の祀るもう一方の神である山の神についての議論が，民俗学において広く展開してきたからであろう。

さて，瀬戸内海地域の石屋の祀るフイゴ祭りについては以下のような報告がある。

〈事例 7〉岡山県笠岡市白石島

一一月七日は，石材採掘者だけのフイゴマツリの日である。フイゴにオカガミをそなえる。昔はオヤを招待して御馳走し，職人を休ませた。実際にフイゴは使わなくなっても，このマツリだけは必ず行なわれている。［福島 1966：405］

写真 5　愛媛県今治市宮窪町の石屋が使っていたフイゴ（本館蔵）

〈事例8〉香川県小豆郡土庄町大部

吹子祭は十一月で，この日は吹子をまつるとともに，親方が石工たちを上座にすわらせて，日頃の労をねぎらうしきたりです。ただ最近では吹子を使わなくなったので，吹子祭はやらない職場もあるようです。［渡辺1987：130］

〈事例9〉香川県坂出市与島町与島

フイゴマツリは11月7日，8日で，フイゴの泥を塗りかえ，お花を供える。そのあと，親方の家で酒宴が開かれる。親方から山主や職人の家に細く長く出るようにといってうどんを配るならわしがある。［瀬戸内海歴史民俗資料館1981：57］

〈事例10〉香川県坂出市与島町小与島

旧11月7日の晩からフイゴマツリなので，6日の晩か7日の朝に餅をついて，みかんといっしょに供える。フイゴマツリは昭和10年代から肉を主体とした料理だったが，ここ数年はすっかりすたれてしまった。この日は職人の正月のような感じで，親方（丁場をしている家）がごちそうした。［瀬戸内海歴史民俗資料館1981：69］

〈事例11〉香川県丸亀市広島町

一一月八日は石工がフイゴマツリをする。
お餅をついて各戸へ配る。［武田1966：505］

石屋のフイゴ祭りの祭日は11月7日または8日とする例が多いが，職種にかかわらず，フイゴ祭りは旧暦の11月8日に行なわれるのが一般的である。「鍛冶屋は陰暦の一一月八日に鞴祭りというものを行なった。一日中仕事を休み，鞴を清めて注連縄（しめなわ）を張り，御神酒，赤飯を供えて祭る。京都では稲荷信仰に重なり合って，お火焼き（オヒタキ）と呼んでいる。江戸ではこの日蜜柑を道路にまいて，これを子供たちに拾わせたりした」という［磯貝1959b：303］。このように，フイゴ祭りを稲荷信仰と結びつける考え方は「大づかみにいって近畿の一帯から北陸，さらには東北の南部，西では四国の東寄りの地方に見られ」，「東京都下でもいずれかといえば稲荷神をまつるふうが多い」という。さらに，「こうした地方では霜月八日に鞴祭をその祭日とし，蜜柑をそなえたり，ふるまったりするふうが昔は盛んであった」［石塚1972：62］。この11月8日は伏見稲荷大社の火焚祭の日であり，謡曲「小鍛冶」にあるように，一条天皇の代に刀匠・三条小鍛冶宗近が稲荷明神のご加護によって無事に勅命のとおりに名剣「小狐丸」を鍛え上げたという故事がフイゴ祭りと稲荷信仰を結ぶとするのが通説であるが，前出の石塚は稲荷神が「稲の神・食物の神・調理の神と転ずる過程において火の神としての一面をも持つ時代があった」とし［石塚1972：63］，また，伏見稲荷といえば11月8日の火焚祭というイメージが鍛冶や鋳物師に広がったと推測している［石塚2000：43］。

さて，この日のフイゴ神の祀り方として注目したいのは，〈事例9〉にあるようにフイゴの泥を塗りかえ，お供えをするというものである。フイゴは木製の箱形の送風装置であり，下部中央に設けられた羽口から風が出る。この羽口の前に泥で塗り固められた炉が築かれ炭やコークスで火がおこされるが，送風の無駄がないよう炉と羽口も泥で塗り固めて接続される。フイゴ祭りの日にはこの泥を塗り直し，フイゴをきれいに整えてお祭りをするのである。岡山県笠岡市北木島ではフイゴ

の上に御神酒と松の枝を供えたといい（大正７年生まれの話者談），愛媛県越智郡上島町豊島では鏡餅と蜜柑を供えたという（大正 11 年生まれの話者談）。管見の限りでは，こうした祀り方は瀬戸内海各地の石屋で共通している。また，町田市立博物館に所蔵されている「鍛冶屋神掛軸」には両脇を白狐に囲まれた三面六臂の鍛冶屋の神の前にフイゴが置かれ，その上に三宝に盛られた団子と御神酒とが供えられており［府中市郷土の森博物館 2010：57］，こうした祀り方が鍛冶仕事にかかわる職人の間で一般的なものであったことがうかがえる。

さらに，もう１点指摘しておきたいのは，フイゴ祭りが比較的盛大な宴会をともなうということである。〈事例 10〉に「職人の正月」という表現があるように，丁場で働く職人が１年でもっとも楽しみにしているのがフイゴ祭りであったという。この日には日当が出たうえで仕事は休みになり，職人には酒と料理がふんだんに振舞われたという話を各地の石材産地で聞くことができる。また，フイゴ祭りには必ず肉料理が振舞われるという話も各地で聞かれる。愛媛県の豊島で丁場を経営していた前出の石屋は牛肉を毎年２貫（7kg 以上）も買って振舞ったといい，北木島ではこの日にすき焼きが振舞われるのが定番だったという。フイゴ祭りの日に肉を食べる習慣がいつごろからあり，どのような地域的広がりを持つのかは明らかでない。また，肉を食べることにどのような意味があるのかについても不明である。ただ，雇い主が職人に対して肉という最高の食材をもって饗応する姿には，単なる宴会ではなく，一種の儀礼的要素を見出すこともできるであろう。(14)

山を支配する神としての山の神への信仰に対して，フイゴ祭りは採石に用いる金属製工具の製作・修理，つまり，鍛冶仕事にかかわる祭りである。鋳物師や鍛冶屋にとってのフイゴが金属を溶解・製錬・加工するという仕事の本質に直結する道具であるのに対して，石屋が石を採るために必要とする鑿や矢を製作・修理するための道具としてのフイゴの重要性は二次的なもののようにも考えられる。しかし，豊島で丁場を経営していた前出の話者は鍛冶仕事の難しさについてつぎのように語ってくれた。「道具をこさえるのでも刀鍛冶と同じ。石を切るノミの鍛え方によって切れ方が違う。焼きを入れるのに，金々（かねがね）によって質が違う。それを覚えとかんと。これくらいの金じゃったら，これくらいの焼きとか。湯加減と焼け加減と。それがないと，相手が石だから先が折れる。硬すぎたら折れるし，柔らか過ぎたら切れんし。そのへんがちょっと分からんところがあった。それは経験」［筆者調査 2009］。鍛冶仕事ができなければ石屋はできない。石屋の修行に入ったカシキがまず覚えるのも鍛冶仕事であった。石屋にとってフイゴ神が年に一度の祭りを欠かすことのできない重要な神であったことは確かである。

❺……「篤い信仰」の留保

不十分であるかもしれないが，石屋の行なう山の神祭りの祭神，祭祀の内容などについて現在得られる範囲の具体的な事例をもとに考察し，フイゴ祭りについても整理を試みた。以上の作業からは，年に３回，石屋が欠かさずに行なってきた山の神祭りの様相が浮き彫りとなったはずである。

ただ，以上の石屋の山の神祭りについての報告が，祭祀の実態を十分に反映したものであるかについては疑問が残る。それは，ここまでの報告では石屋自身がどのような姿勢で祭りに臨んできたかという視点が欠如しているからである。石屋の語りをその口調や表情に注目して聞き，さらにそ

の日に語られた話全体のなかでの山の神の話の位置づけなどから総合的に判断した場合，石屋の山の神祭りはどれほど熱心に行なわれてきたと考えられるのであろうか。それは，山の神祭りについての語りとフイゴ祭りについての語りを比較することで鮮明になる。

これまでも登場した大正 11 年生まれで，愛媛県越智郡上島町の豊島で終戦直後から 30 年以上にわたって採石に従事していた石屋の語りを例に考えてみたい［筆者調査 2012］。

豊島で石屋の山の神が祀られていたのは山の頂上であり，「ちょこっとした石のかっこうをしてるの」を祀っていたという。「ちょこっとした石」とは小さな石塔であり，その上を板状の石で覆って雨をよけていたという。この山の神は，豊島で採石をしていた 8 軒が共同で祀っていたものである。年に 1 回祭りをしていたというが，それが何月であったかは記憶が定かでない。山の神への祈願の内容については「まあ，災害が起きんように，ええ石が出ますようにゆってな，そういうことを祈念するんよの。まあ，昔のこったけん，怪我が多かったけんな。山の神さん拝むのは，無事故で過ごせますようにゆうて，まあ，一番は災害よの。それはもう昔のことよ。手作業じゃしな。機械もなし。よう怪我しよったわいな」と，作業安全と商売繁盛がその中心をなす。また，参拝の様子については「めいめい行くんよね。みんなが来て。『今日は山の神さんじゃけん』ゆうたら，『まあ，参って行くか』ゆうくらいで。祭日ゆうては，祠がないんじゃからね。神主さんも呼んでないんじゃけんね。山の神さんじゃゆうけん『山の神さんちょっと拝んでくるか』ゆうぐらい」だったという。そして参拝の後は酒を飲み，若い職人は賭け事に興じて貴重な有給休暇を過ごしたという。

こうした山の神についての話が和やかに淡々と語られたのに対し，話がフイゴ祭りのことになると，「フイゴ祭りはね，もう，大事な祭りじゃってな」と石屋の語りはにわかに熱を帯びてくる。この石屋は山の神よりもフイゴ神の方が大切だとはっきり答えたうえで，その理由をつぎのように述べている。「いや，フイゴさんは。じゃけん，石屋は毎日ね，石へ穴開けるの手掘りじゃったの。むかし。そしたら，鑿ゆうてね，石を割るため穴くりましょう。それを，じゃけん，フイゴでこう毎日こう焼かないかん。フイゴがなかったら石屋はできん。そいで，フイゴさんのおかげじゃけん，毎日，フイゴさんの世話になるんじゃけんな。今頃はもうチッピングじゃなんじゃいうて『えいや』でブルルルルってやりおったけんどの。昔はみんな手掘りじゃけんの。ほいたら，それ，道具をその，石じゃけんちびらいね。ほいたら，火作りよね。焼いてから。ほれから，先をとがらせて。石が良く切れるようにな。じゃから，フイゴがなかったらいかんのよね」。そして，フイゴ祭りの日には，肉を中心としたごちそうを食べ，酒を飲むということについては前述のとおりである。豊島では寿司も作って職人に食べさせ，また，石屋以外の家にも配って回ったという。

このような，山の神祭りよりもフイゴ祭りを石屋の重要な祭りとする考え方は豊島の石屋だけのものではない。これはあくまでも筆者の印象であるが，古いことを知るどの石屋に聞いても，山の神よりもフイゴ祭りについての記憶の方が鮮明であり，「石屋の祭りといえばフイゴ祭りだ」とまで言う石屋もいる。そして，必ず話題の中心となるのが，フイゴ祭りの日は仕事が休みになり，酒を飲みごちそうを食べたということである。

以上をまとめると，これまでの研究が石や山と人という自然と人間との関係性をふまえ，石屋の神としての山の神に注目する傾向にあったのに対して，実際に石屋が重視しているのは金属製の道具の製作や修理にかかわるフイゴ神の祭りの方だということになる。ただし，それでもフイゴ神に

対する信仰が必ずしも「篤い」と言い切れるものではないということには留意が必要であろう。フイゴ祭りについての語りの中心は飲食を楽しんだことにある。

それでは，こうした石屋と山の神とフイゴ神の三者の関係をどのように整理したらよいのであろうか。

堀一郎の示した信仰や儀礼の強化を促す３つの条件，すなわち排他的な技術集団による複雑な技術伝承・一般の農民や漁民からの差別や卑賤視・危険や不可抗力との対峙は，一定のレベルにおいて石屋も満たすものである。しかし石屋の場合，かならずしもそれが山の神やフイゴ神への信仰の強化には結びついていないようである。

たとえば，信仰の契機のひとつとされる被差別の問題について考えてみよう。一般的には石屋のように移動性の高い職人は差別的扱いを受けることが多く，各地で信頼を獲得するために，また同業者との連携を保つために，同種の由緒書を持ち伝えたり職祖や職能神を共有する傾向にあるとされる。由来や由緒をしたためた偽文書のようなものは「同質の文化や集団に胚胎するのではなく，異質なものとの接触のなかに生成される場合が多い」のである［小池 2004：116］。しかし，石屋に関してはほとんどその由来や由緒が語られることはない。もちろん山の神やフイゴ神の祭りが同業の仲間によって行なわれるが，その祭りに対する姿勢はこれまで述べた程度のものである。それではなぜ職能神を契機とした強い紐帯を必要としてこなかったのか。その原因のひとつとして，石屋の仕事の多くが権力者と結びついたものであったことを指摘しておきたい。

石屋という仕事の成立は古い。人間が石を利用するようになり，やがて専門的に石を割り加工を施す人が登場したのがその起源であろう。しかし，小稿で取りあげた山石屋のするような大規模な採石が多く行なわれるようになったのは中世も末になり，築城にともなう石材の需要が高まってからである。そしてその後も，新田開発や塩田の築造といった近世の開発をとおしてその技術は育まれ，近代のさらなる石材需要を迎えている。つまり，石屋の仕事は常に大規模な公共工事や開発とともに発展してきたと考えられるのである。したがって，国家が強制力を有していた時代には，石屋は決して石材産地住民との不利な関係性のなかで仕事をしたわけではないのである。

写真６　愛媛県今治市宮窪町の現代の丁場

また，危険や不可抗力との対峙の問題を考えてみても，常に危険と隣り合わせで仕事をする石屋の信仰，とくに山の神に対する信仰が薄いという実態は予想を大きく裏切るものである。しかし，これまでも述べてきたように，石屋は自然と対立する存在であり，山の神の所有物たる石を，あるいは山の神そのものとしての石を容赦なく切り出す。石屋が石を割るのに失敗する伝説の数々も，石の霊威を恐れない石屋の存在なくしては成立しえない。山の神の存在を信じきっていては石屋などつとまらないのであ

る（写真6）。

ただし，それでも石屋が山の神を祀りつづけているという一面は残される。石屋の仕事をしていれば必ず事故は起こるし，思うように質の良い石が出ないことや石が売れないことも多い。そうした際に，普段はフイゴ神の陰に隠れていた山の神が表舞台に登場するのである。たとえば，茨城県笠間市では事故で怪我人や死者が出た場合には「臨時山の神」を行なって仕事場を清めたといい［西村1968：43］，香川県丸亀市広島町釜の越では2人が命を落とす大きな事故をきっかけに山の神の祭祀が盛んとなっている［筆者調査2001］。また，愛媛県今治市宮窪町ではあまりにも石が売れない時に，普段は山の神を祀らない石屋が山に放置された他の丁場の山の神を持って下りてきたという話も聞かれた［筆者調査2012］。このように，ある局面において突然信仰が顕在化するといった姿の方が山の神信仰の本質に近いのかもしれない[15]。

おわりに

小稿では，瀬戸内海地域で山から石を切り出してきた石屋の山の神信仰について，石屋という仕事の歴史的な発展の経緯や労働形態，労働組織，生活，技術や危険性などをふまえたうえで，とくに祭神，祭日，祭場および施設，祈願内容を中心に具体的な事例から明らかにした。さらに，山の神祭りについての石屋の語りに注目し，同じく石屋の年中行事であるフイゴ祭りについての語りと比較することで，石屋による山の神信仰が必ずしも石屋の信仰の中心をなすものではないという結論を導いた。

石屋は高度な技術者集団である。また，移動性が高いうえに収入も多く，石材産地に古くから住む人びとからは差別的な扱いを受けることも少なくなかった[16]。さらに，石屋という仕事に災害はつきものであり，常に死と隣り合わせの状況で作業が行なわれてきた。こうした石屋の仕事の特質は，堀一郎が示した生業にともなう信仰を強化する条件を多くの点で満たすものである。しかしながら，石屋と山の神との関係で前提とされる両者の緊密性を一度解きほぐし，祭りの様相を当事者の語りに注目して整理した場合，決して篤い信仰と位置づけることのできない実態が浮かびあがったのである。

註

（1）――福島県会津地方や長野県伊那地方、山形県山形市などに伝えられる、加工にたずさわる石屋の巻物については［久野2006］などの研究をあげることができる。

（2）――小稿で取りあげる事例はすべて近代のものであるが、石屋による山の神祭祀は形を変えながらも、遅くとも近世中期より続くものという前提に立っている。1754（宝暦4）年に編まれた『山海名物図会』の巻之一では鉱業や金属の精錬が取りあげられているが、そのなかの「金山鋪口」では坑道の入口の上部に「山神宮」が描かれている。また、「山神祭」では「山神宮」の祠で祈祷が行なわれ、その前で相撲を取る様子が描かれている。採石に従事する人びとの祀る山の神も、鉱山の守護神としての山の神に類するものであったと考えられる。

（3）――石屋の技術は昭和30年代ころまで徒弟制度によって受け継がれていた。たとえば終戦前の場合、尋常小学校や高等小学校などを卒業と同時にカシキとして丁場に雇われ、5年程度の修行を経て職人として独立したという。はじめのうちは炊事と洗濯がおもな仕事であり、その後鍛冶仕事から徐々に技術を身につけていった。

（4）――よい商売であるならば地元の人がより積極的に

従事すればよいとも思われるが、採石は特別な技術や体力、忍耐力、職人を確保するネットワークなどを必要とする。さらに、よい石が出なければ他の産地に移るというフットワークの軽さも重要である。これは地元出身の石屋には難しい条件であろう。

（5）――こうした状況は他の石材産地でも見られた。たとえば、昭和30年代前半、山口県徳山市の沖に浮かぶ黒髪島には採石関係の労働者が150人おり、そのうちの32人が家族とともに島に住んでいたという。島には社宅が21軒あり「島の社宅に住んでいる人は（中略）愛媛県越智郡と黒髪島の隣の大津島（徳山市）出身者ばかり」であった［中国新聞社 1959：32］。労働者には専門的な技術を持たない人びとが多く含まれていることを勘案すると、専門的な職人の多くが島外、とくに愛媛県出身の人びとだと考えることができる。

（6）――近代の山石屋の好景気については［松田 2011］を参照されたい。

（7）――折口信夫は石がいし（石）ともいわ（岩）とも呼ばれることについて「いはといふのは、いへといふのと同根のことばであつて、日本語では、非常に近いことばです。家ごもる義にいはむといふのがあります。いはといへと関係があるのです。（中略）私は、更にいはむには、忌み籠るいむといふ聯想があると思ひます。此三つのいへ・いは・いむの関係は、長い證明がなければ、完全にはなりません。ともかく、魂が籠つてゐる場合、いしをいはと言ふと、かういふ風に見当を附けておきます」と解釈している［折口 1932：49-50］。特別な力の宿りやすい物体としての岩（石）は神祭りの場として最適といえよう。

（8）――こうした石に対する感覚は、決して伝説のなかだけのものではない。たとえば、山口県周南市の黒髪島では「明治十一年に加藤万助・近藤林蔵が同地区の払い下げを山口県庁に出願し、同年から蓑島石材は割り子五名を限り、一ヵ年山金六〇円、黒髪石材は同三〇円で払い下げをうけたが、同島が神域で、これを採取する者は神罰をうけるという迷信にたたられて、うまくゆかなかった」という［徳山市史編纂委員会 1985：1102］。

（9）――もちろん、家の神棚などに他の神々と一緒に山の神を祀り、この神棚に向かって毎日手を合わせるという事例は聞かれる。しかし、山の神だけが特別に意識されることは稀である。

(10)――筆者は以前、白石島における山の神の祭日を正月・5月・9月と記したが［松田 2010：246］、調査ノートを確認したところ5月ではなく4月であることが明らかとなった。訂正したい。

(11)――『日本山海名物図会』巻之一では金銀銅鉄の採掘が取りあげられているが、「山神祭」において「山の神は山口に所をえらびて社を勧請す。神はおのおのの願いによりて定まりたることなし」としているのが興味深い［千葉 1970：205］。

(12)――『山海名物図会』巻之一の「山神祭」においても「神はおのおのの願いによりて定りたることなし」とあるのが興味深い［千葉 1970：205］。

(13)――これは、〈事例6〉と同じ香川県丸亀市広島の釜の越という地域の事例である。詳細については［松田 2010：170-208］で論じた。

(14)――雇い主と雇われる人との間で開かれる宴席には、網元と網子が正月や漁期前に行なう例をはじめとして枚挙にいとまがない。そうしたなかには、熊本県下の山師の山の神祭りのように「年三回の神祭にも区分があつたようで、正月の十六日には親方が杣頭と山子を招き、五月には杣頭が山子を招待し、九月には反対に山子が杣頭を招いて祝宴を催したものである」といった雇い主、職人の頭、職人の三者が饗応しあう事例もあったようである［丸山 1955：112-113］。瀬戸内の石屋の事例ではもっぱら雇い主から職人に対しての接待が行なわれているが、その源流には相互に饗応しあう儀礼があるのかもしれない。

(15)――漁師の祀る船霊が嵐の前にイサンで危機を知らせて難を逃れたといった話など、自然と人とを媒介する神仏の祭祀にはこうした傾向がみられるのかもしれない。山の神や船霊のような自然神的な職能神と、火という自然を掌りながらも、より体系化された職能神としてのフイゴ神とは、その性格の異質性を意識して扱う必要があるだろう。今後、職能神の性格に基づいた分類が行なわれなければならない。

(16)――この点については拙稿において事例を挙げて論じた［松田 2010：170-208］。

参考文献

池上廣正　1959「自然と神」『日本民俗学大系8 信仰と民俗』平凡社
石塚尊俊　1972『鑪と鍛冶』民俗民芸双書70，岩崎美術社
　　2000「金屋子神の信仰について」『古代文化記録集 しまねの古代文化』第7号，島根県古代文化センター

磯貝　勇　1959a「石屋」『生業と民俗』日本民俗学大系 5，平凡社
1959b「鍛冶屋」『生業と民俗』日本民俗学大系 5，平凡社
岡山民俗学会・香川民俗学会　1970『小豆島の民俗』
折口信夫　1932「石に出で入るもの」『郷土』石特輯号，岡書院
加藤紫識　2010「都市における同業神信仰」『史潮』新 68 号，歴史学会
郷土発行所　1932『郷土』石特輯号，岡書院
倉田一郎　1937「山の神」柳田国男『山村生活の研究』民間伝承の会
元気ユニオン in 北木　1996『ふるさと読本「北木を語る」―島と石と人の営みと―』
小池淳一　2004「偽文書と民俗―民俗書誌論再説」久野俊彦・時枝務『偽文書学入門』柏書房
小島瓔禮　1979「自然崇拝と神」『神観念と民俗』講座・日本の民俗宗教 3，弘文堂
財団法人民俗学研究所　1955『改訂綜合日本民俗語彙』第 1 ～ 3 巻，平凡社
瀬戸内海歴史民俗資料館　1981『本四架橋に伴う島しょ部民俗文化財調査報告』第 1 年次
武田　明　1966（1975）「香川県丸亀市広島」柳田国男指導・日本民俗学会『離島生活の研究』国書刊行会
田中宣一　2010「村開発と職祖の伝承」田中宣一先生古稀記念論集編纂委員会編『神・人・自然―民俗的世界の相貌―』慶友社
千葉徳爾註解　1970『日本山海名産名物図会』社会思想社（平瀬光雪 1754『日本山海名物図会』巻之一）
中国新聞社　1959『瀬戸内海』上巻，中国新聞社
徳山市史編纂委員会　1985『徳山市史』下巻，徳山市
ナウマン・ネリー　1994『山の神』言叢社
西村浩一　1968「常陸の石工」『日本民俗学会報』第 57 号，日本民俗学会
2000「職業集団の信仰の民俗慣行」『民俗学論叢』第 15 号，相模民俗学会
野本寛一　1975『石の民俗』雄山閣
橋詰延壽　1937「山の神とヲコゼ」『民間伝承』第 2 巻第 8 号，民間伝承の会
橋本鉄男　1979『ろくろ』法政大学出版局
久野俊彦　2004「＜由来＞＜由緒＞と偽文書」久野俊彦・時枝務編『偽文書学入門』柏書房
2006「『石屋の巻物』の説話」『奥会津地方の職人巻物―書承と口承の交錯―』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第 20 集，神奈川大学常民文化研究所
福島惣一郎　1966（1975）「岡山県笠岡市白石島」柳田國男指導・日本民俗学会『離島生活の研究』国書刊行会
府中市郷土の森博物館　2010『お稲荷さんの世界』府中市郷土の森博物館ブックレット 13
堀田吉雄　1966『山の神信仰の研究』増補改訂版，光書房
堀　一郎　1959「職業の神」『信仰と民俗』日本民俗学大系 8，平凡社
松尾恒一　2011『物部の民俗といざなぎ流』吉川弘文館
松田睦彦　2010『人の移動の民俗学―タビ〈旅〉から見る生業と故郷―』慶友社
2011「民俗の衰退と表出―地方採石業者の経験した高度経済成長―」『国立歴史民俗博物館研究報告』171，国立歴史民俗博物館
丸山　学　1955「山師の伝承」『日本民俗学』第 2 巻第 3 号，日本民俗学会
宮本常一　1970「採石業の近代化へ―北木島・馬越儀三郎氏の抱負と実践―」『日本の離島』第 2 集（『宮本常一著作集』第 5 巻）未来社
三輪茂雄　1978『臼』ものと人間の文化史 25，法政大学出版局
八木橋伸浩・遠藤文香・松田睦彦　2001「笠岡諸島白石島における民俗の変容と継承」『岡山民俗』215，岡山民俗学会
柳田国男　1906（2006）「山の生活」『柳田國男全集』第 23 巻，筑摩書房
渡辺益国　1987『石屋史の旅』渡辺石彫事務所

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2013 年 1 月 24 日受付，2013 年 3 月 26 日審査終了）

A Re-examination of Mountain Gods Worshiped by Stonemasons : The Realities of Religious Rites and a Question as to the Strength of Their Belief

MATSUDA Mutsuhiko

This paper is aimed at revealing the real state of religious rites of stonemasons who engage in quarrying in mountains and worship mountain gods. To this end, it is necessary to overcome three problems caused by the study focusing on relations between occupation and religious belief. More specifically, the occupation covered by the study is limited. In addition, despite many reports about the form of rites, their real state remains unknown. Furthermore, the study is premised on the fixed relationship between a particular occupation and occupational gods.

With these three problems in mind, we specifically examined the religious rites of mountain gods performed by stonemasons in the Seto Inland Sea area. The results discovered that some shrines are not connected to specific deities while others are sacred to neighboring gods such as Ohoyamazumi-no-Mikoto from Ohyamazumi Shrine and the God of Ishizuchi from Mount Ishizuchi. There are many festivals on the seventh or ninth of January, May, and September, and the study indicated that this custom might be developed by mixing the idea spreading in the Kinki, Chugoku, and Shikoku regions that the seventh or ninth of the month is the feast day of mountain gods with the idea spreading centered on the Kyushu region that January, May, and September are the feast months of mountain gods. Moreover, there are a variety of worship places, ranging from shrines to simple religious sites at specific places in mountains, and stonemasons pray for protection against unforeseen accidents, production of quality stone, and so on.

These forms of rites, however, cannot clarify their realities. Therefore, we paid attention to talks of people involved in mountain god festivals. By comparing it with talks about gods of forges that stonemasons also worship, we revealed that their belief in mountain gods is not necessarily strong. This argument indicates the risk of study premised on the fixed relationship between a specific occupation and occupational gods, as described above.

key word: Stonemasons, religious belief, occupational gods, mountain gods, forge gods